

よき書物をじっくりと繰り返し読むということ

—平成14年度「初期ゼミ」における教育実践を通して—

犬塚博彦*

(2003年3月20日受理)

Hirohiko INUZUKA

Reading Classics Intensively and Repeatedly

1. はじめに

本稿は、筆者が岩手大学教育学部で平成14年度前期に担当した「初期ゼミ」において、「よき書物をじっくりと繰り返し読むということ」というテーマのもとに行なった全13回の授業を振り返り、どのような構想のもとにどのように展開していったかを報告するとともに、その意義について考察することをその目的とする。

2. 初期ゼミ担当に際して立てた構想

2.1 初期ゼミとは

初期ゼミは、岩手大学教育学部で平成12年度から導入された新カリキュラムにおいて新たに設定された科目で、平成14年度はその3年目にあたる。初期ゼミは、大学に入学したばかりの学生たちを対象とした1年次前期の必修科目として位置づけられており、その目的として新入生向けの資料には次のように記されている。

(1) 初期ゼミの目的

「大学での勉強を始めるにあたって、大学で学ぶことの意味や、大学での学び方とはどんなものなのかを考え、知ることは大切である。初期ゼミでは、新入生のためのオリエンテーションを行うとともに、あるテーマについての発表・討論などを通して勉学への動機づけをすることを主な目的としている。」

2.2 筆者担当の「初期ゼミの概要」

そこで筆者は、平成14年度前期に初期ゼミを担当するにあたって、その構想として、よき書物をじ

*岩手大学教育学部

っくりと繰り返し読むというテーマを中心に据えて、これから大学生活を始めようとする学生たちに対して、学問をするということの意義や、ものを学ぶという姿勢についての何らかの有益な示唆が与えられるような内容のゼミを展開したいと考えた。そして新入生向けに配布される資料としての「初期ゼミの概要」においては、以下のような構想をあらかじめ示した。

(2) 筆者の初期ゼミの概要

テーマ：「よき書物をじっくりと繰り返し読むということ」

「これから大学生活を始める皆さんにとって大切なことは、まずは志をしっかりと立てるということ、そうしてみずからの力でものを考え的確な判断ができるような自分づくりをしていくことにあると思います。そのための方法の一つとしてお薦めしたいのがよき書物をじっくりと読むということなのですが、このゼミでは洋の東西を問わず永く読み継がれてきた古典的名著のうちのいくつかを紹介し、その中の著者の言葉に心静かに耳を傾け、そこから学んだこと考えたことなどについて、対話を通して皆さんとともにその理解を深めていきたいと思っています。」

2.3 《よき書物とは》：初期ゼミのテーマの名称について

ここでテーマとして掲げた言葉の表現について若干の説明を加えておくことにしたい。筆者は、テーマを提示する際にその表現として「書物を読むということ」というようなシンプルな言い方はせずに、若干の修飾語を加えて、「よき書物をじっくりと繰り返し読むということ」という少し含みを持たせた表現を取って用いることにした。

このうち、まず「よき書物」という表現についてであるが、この表現から意図することは、読む対象はどのような書物でもよいというのではなく、「よき書物」と確かに言えるものを読むということである。

では、その「よき書物」とはどのようなものであるかということであるが、ある書物を読んで、それが「よき書物」であるということが判断できるようになるためには、その前提として、そもそも「よきもの」とはいったいどのような性質のものなのかということがわかっていなくてはならないことになる。

ところで、ほんとうの意味における「よきもの」は、心ある人々によって一般に大切にされるものである。そして人間が人間であるかぎり、いつの時代でもどこの場所においても人々に感動を与える何かがあるとするならば、それが書物という形をとってあらわれた場合には、時を超え、地域を越えて、心ある人々によって大切に読み継がれるものであると考えることができる。つまり「よき書物」とは、普遍性と永遠性をその属性として持つものであり、それが今日私たちの間で「古典」として位置づけられているものであるとすることができる。ここで言う古典とは、西洋的な意味におけるクラシック (classic) のことであり、その言葉の本来の意味は「第一級のもの」であり「最高級のもの」にある。そこで筆者の初期ゼミでは、大学に入学したばかりの学生たちに、時を超え、地域を越えて永く読み継がれてきた古典的名著のいくつかにはまずは触れてもらい、「よきもの」の「よさ」を理解するそのきっかけを提供しようと考えた。

2.4 《何を読むか》：素材となる書物の選定にあたって

そこで次に問題になるのが古典的名著の中から「何を選んで読むか」ということであるが、読むべ

き書物の領域については、学部で立てている初期ゼミの趣旨や授業方針に合致するように、以下の5つのテーマを設定することにした。それは、①読書と思索をテーマにしたもの、②学生生活を送っていく中でのヒントになりそうなことについて触れてあるもの、③自己を磨くということテーマにしたもの、④学問の世界における師弟関係の姿を描き出したもの、⑤人生いかに生きるかということテーマにしたもの、である。ここでそれぞれの領域ごとに、ゼミで取りあげることにした書物について触れておくことにしたい。

① 読書と思索をテーマにしたもの

一つめは、書物を読むということそのものを題材にしたものの中から、ヒルティ「読書について」を取りあげ、書物を読むときの心構えやその姿勢について著者の言葉に耳を傾けてもらうことにした。この他、読書との対比において、ものを考えるということについて論じたショウベンハウエルの「思索」を読んでもらうことにした。

② 学生生活を送っていく中でのヒントになりそうなことについて触れてあるもの

二つめは、新入生たちがこれから学生生活を送っていくなかで、もしかしたら直面することになるかもしれない不安や疑問点を解く手がかりとなりそうなことを題材にしたものを取りあげることにした。具体的には、P.G. ハマトンの『知的生活』の中から「まえがき」、「記憶力が悪いと嘆いている学生へ」、「時間が足りないと嘆いている暇な人へ」および「豊かな才能と旺盛な活力に恵まれ、未来に遠大な計画を企てている若者へ」の章、そしてヒルティの『幸福論(第一部)』の中から「時間のつくり方」の章を読んでもらうことにした。

③ 自己を磨くということテーマにしたもの

三つめは、ものを学ぶということを通して自己を磨き、自分自身をよりよきものにみずから築きあげていくということを題材にしたもので、サミュエル・スマイルズの『自助論』の中から「自己修養」および「すばらしい出会い」の章、そして幸田露伴の『努力論』の中から「凡庸の資質と卓絶せる事功」および「努力の堆積」の章を取りあげることにした。

④ 学問の世界における師弟関係の姿を描き出したもの

四つめは、学問の上での師弟関係において、師からものを学ぶ際の心構えとか姿勢について触れたもののうち、エッカーマン『ゲーテとの対話』の中からいくつかの章を取りあげることにした。また、教師をめざす学生たちに、教師の姿および教育そのものについて考えるきっかけを提供したいと考えて、三浦修吾『学校教師論』の中から「教師の知識と人格」および「芸術としての教育」の章を取りあげることにした。

⑤ 人生いかに生きるかということテーマにしたもの

五つめは、学生たちが志をしっかりと立てて、これからの長い人生を夢と希望をもって前向きに歩んでいってほしいという期待を込めて、内村鑑三の「後世への最大遺物」を、そして人生そのものについて考えるきっかけになればと思い、セネカの「人生の短さについて」および武者小路実篤「人生論」を取りあげることにした。

3. 初期ゼミの展開：その精神的態度を中心に

3.1 学生の側での事前の準備

本章では、ゼミを進めるにあたって筆者のとった精神的態度を中心に論じていくことにする。学生たちには、その週で取りあげることにしている書物について、その範囲をあらかじめ前の週に示しておき、ゼミの日までに以下において詳しく述べる「古典を読むときの心構え」を踏まえて各自取り組んでおくように指示をした。その際、自分にとっての学びとなった部分を、前後の文脈の中でのその言葉の使われ方に十分な注意を払いつつ、そのままの形で抜き出して書き写し、それについて自分で考えたことを添えてレポートとしての体裁を整えてゼミに臨んでもらうことにした。

3.2 《どのように読むか》：古典を読むときの心構え

次に、古典として位置づけられる書物を読む場合に、どのような心的態度で臨んでいくのがよいのかという点に関して、筆者の初期ゼミの中で学生たちに実際に取り組んでもらった方法とその手順について、ここで述べておくことにする。

(1) 著者が何について何と言っているかを、まずは書いてある通りに正確に把握するということ。

古典的名著に取り組む際の心構えとしての第一は、読み手の側での好き嫌いの感情とか先入見など主観的なものは一切入れずに、自己から切り離れた形でまずは書いてあることを書いてある通りに正確に把握するように努めてもらった。その背景としては、対象となるものをあるがままにそのまま観るという精神的態度があり、これは古代ギリシア以来の西洋における学問の伝統として今日まで受け継がれているテオリア（観想）の精神に連なる姿勢でもある。これが第一段階である。

(2) 著者がどのような考え方をよしとするのかをその言語表現から明らかにするということ。

書物というものは一般に、著者が読者にぜひとも伝えたいと考えている内容があるがゆえに書かれるものであって、その背後には何らかの考え方をよしとする著者の姿勢があるのが普通である。古典的名著を前にして読み手の側で取り組むべきこととして重要なのは、著者がよしとするその考え方を、文字として記された言葉の用いられ方をもとに浮き彫りにし、著者の姿勢やその精神的態度を明らかにしていくことであると考えた。このプロセスはまた、書かれた言葉をもとに著者の思考の軌跡をたどり、その思考法を吟味することでもある。これが第二段階である。

(3) 著者がよしとするその考え方を、みずからの力でじっくりと考え、吟味し、そうしてなるほど確かにその通りだと判断したものを確実に選び取って自分の心の栄養にするということ。

これは、上の二つの過程を経たうえで、書物の中から真の意味において自分自身を生長させ自己の認識力を高めていくことにつながる学びを見出し、それを確実に自分の中に取り入れていくことであり、古典を読む際の最も重要なプロセスとして位置づけることができる。これが第三段階である。

なお、書物は批判的に読むという考え方も一方にはあるということは承知しているが、筆者は古典を読む際の読書指導としてはこの立場は取らなかった。なぜならば、読み手の側での認識力がいまだ十分に及ばない段階で批判的な態度でもって古典的名著に臨んだ場合には、それはただ単に著者の考えに対して自分はそうは思わないという個人的な印象をいだいてそれで終わりになってしまうことも予想され、そうすると学生がみずからそこから学びの芽を見出すということが難しくなってしまうと

考えたからである。それよりもむしろ、古典的名著に取り組む際には、己を空しくして著者の声に心静かに耳を傾け、自分にとってプラスになる考え方があればそれを謙虚に学んでいくという姿勢を大切にしてほしいと考えたのである。

3.3 対話 (dialogos) に重きをおいたということ

3.3.1 その精神的態度

ゼミでは、教える立場にある私たち教師と学ぶ側にある学生たちとがともに同じ時間と空間を共有するわけであるが、大切なのはそこに一つの「場」ができるということである。とりわけ初期ゼミのような少人数のクラスにおいて重要なはたらきをするのが教師と学生との間で交わされる対話 (dialogos) である。学問の世界における対話とは、言葉 (logos) をもって真理 (alētheia) を探究するというはたらきをそこに見出すことができる。

その対話の場において教師が果たすべき役割として最も重要なのは、英語の“education”という言葉の原義にもあるように、学生たちがその内面においてもっている本来のよきものにみずから気づかせ、その能力を最大限に導き出すように努めていくことにある考えた (“e-”「外へ」「-duc-」「導く」)。

そこでゼミの中で筆者はまず、学生一人ひとりの心の様子を見て、その時に一番ふさわしい言葉をもって語りかけることを心がけ、学生たちが自分の考えていることを口にしやすいような雰囲気をつくって、そこから対話 (dialogos) をおこしていくように努めた。

3.3.2 対話の展開とその方向づけ

ここでゼミにおける対話 (dialogos) の展開について、その方向づけという観点から考察しておくことにする。ゼミではまず、学生たちが準備の段階でここは大切だと判断をして抜き出してきた箇所を、一人ひとり順に報告してもらうことから始めることにした。ひと通り報告が終わったあとで、筆者自身がかつて読んで感銘を受け、印をつけておいた箇所をゼミの中で紹介し、学生たちが抜き出してきたところと照らし合わせるというプロセスをとることにした。多くの場合、照らし合わせをしていく中で、筆者が印をつけておいた部分を含め、大切であると判断された箇所にはそれぞれ共通部分があるということがその場の中でしだいに明らかになってくるのである。そこで筆者は、それぞれの箇所について、前後の文脈の中でのその言葉の使われ方や意味づけに十分に心を配りながら、その部分が大切であると判断したきっかけなりエピソードを話してもよいという人については、差し支えない範囲でみんなの前で話してもらうことにした。時にはそれを聞いていた別の学生が、自分にも似たような経験があるといった具合に話が展開していくこともあった。そうしたなかで学生たちの眼にしだいに明らかになってくるのは、それぞれの人にはそれぞれの人生ドラマがあるということ、そしてその中での何らかのことがきっかけとなって、ある書物の中のある言葉を目にした時に、それが心の琴線に触れ、その箇所を抜き出そうという気持ちになって、実際にそれを書き写し、そうしてその日のゼミに臨んでいるという事実である。

認識の主体として私たちはそれぞれ別々にものを考えているはずなのに、あるものに接した時にそれが「よきもの」と判断するという点において私たちの間にかなりの共通性が見られるのは、一つには、「よきもの」の「よさ」というものを私たちは心の奥ではすでに知っていて、普段はあまり意識して言葉に直すということもしないかもしれないけれど、ある時、ある場所で、ある言葉に触れたときに、その奥にある「よきもの」の「よさ」そのものに気づくということが言えるのではないか

と考えられるのである。そのきっかけとなるのが一つには古典としての書物であり、また、ゼミの中の対話なのである。そして、対話の中でその道筋を整えていくのが教師の果たすべき重要な仕事の一つであると筆者は考えるのである。

3. 3. 3 プラトンの対話編とその教育観

以上、ゼミにおける対話 (dialogos) の意義と、古典を読み進める際に教師の果たすべき役割の重要性について触れてきたが、筆者が対話を中心に据えたゼミを展開していくうえで一つのモデルとしたのがプラトンの対話編とそこに見出されるその教育観である。プラトンの『国家』という対話編の中に「洞窟の比喩」と一般に呼ばれている一節があって、それに続く話の中でプラトンの教育観が開陳されている箇所があるので、少し長くなるがここで引用しておくことにする。¹⁾

(3) プラトンの教育観【『国家』(Ⅶ514A「洞窟の比喩」, 518C~518D)】

「ひとりひとりの人間がもっているそのような〔真理を知るための〕機能と各人がそれによって学び知るところの器官とは、はじめから魂のなかに内在しているのであって、ただそれを——あたかも目を暗闇から光明へと転向させるには、身体全体といっしょに転向させるのでなければ不可能であったように——魂の全体といっしょに生成流転する世界から一転させて、実在および実在のうち最も光り輝くものを観ることに堪えうようになるまで、導いて行かなければならないのだ。そして、その最も光り輝くものというのは、われわれの主張では<善>にほかならぬ。」【『国家』(Ⅶ518C~518D)】

「教育とは、まさにその器官を転向させることがどうすればいちばんやさしく、いちばん効果的に達成されるかを考える、向け変えの技術にほかならないということになるだろう。それは、その器官のなかに視力を外から植えつける技術ではなくて、視力ははじめからもっているけれども、ただその向きが正しくなくて、見なければならぬ方向を見ていないから、その点を直すように工夫する技術なのだ」【『国家』(Ⅶ518D)】

3. 4 初期ゼミで取りあげた書物の順序について

ゼミで取り扱う書物については、24で触れたように、構想の段階であらかじめ選定し、それを便宜的に5つの領域に分けて位置づけたのであるが、実際の授業では、24で示した①~⑤の順序通りに進めるということはせずに、その時間の対話を通して行きついた話題に比較的近いテーマを扱った書物を、その次の時間に取り組みという形で進めていくことにした。なぜならば、ゼミではあくまでも対話 (dialogos) をその中心に据えて、教師と学生たちとの生き生きとした言葉のやりとりをしていく中で語られた言葉 (ロゴス) をもとにそれを吟味しつつ話の方向を見定めていくという形をとりたいたいと考えたからである。したがって、話の中身がどのような展開になっていくかは、初めからわかっていたわけではないので、ゼミを進めていく筆者の心の中には、いつもある種の緊張感があった。筆者自身その「ドラマ性」を楽しみたいという気持ちもまた一方にはあり、そうして前期の授業全体を通して最終的にそれが内容として筋の通った一つの作品となるような形としてまとめあげていくことを心がけていたのである。

4. 初期ゼミにおける授業実践

前章までで、筆者が担当した初期ゼミの構想と展開について、おもにその精神的態度を中心に論じてきた。この章では、それぞれの古典的著作について、各回のゼミにおける学生との対話の中で話題となった箇所うち、半数以上の学生たちが準備の段階でその部分を大切であると判断をし抜き出していた箇所に焦点をあて、それについての学生たちの感想などもその一部をあわせて紹介していきたいと思う。なお第一級の書物というものは、ヒルティも「読書について」という小論の中で触れているように、一語一語がその価値を持っているがゆえにそうおいそれと抜き書きできるものではないのであるが、ゼミの内容について報告するのが本稿の目的の一つでもあるので、以下においては、仮に前後の文脈を離れたとしても、その言葉だけで十分な重みを持っていると思われるものを中心に紙幅の許す範囲で紹介することにしたい。²⁾

4. 1. ヒルティ 『ヒルティ著作集8』(国松孝次訳)、東京：白水社、1979.

(「読書について」の章：pp.11-31).

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「たくさん規則的に読むこと。良いものを全部読むようにして、悪いものや全然よけいなものを一つも読まないこと。それから良いものを正しく読んで、それを自分のものにすること。」(p. 11)
- ・「(一) たくさん読まなければならないのは、まず第一に、自分一個人が生きてゆく上に必要な知識を身につけるためである。それから第二に、自分の生きている時代だけではなく過去の諸時代にわたって、人間の全部の生活と思想とについての正しい見通しを獲得するためである。」(p. 11)
- ・「(二) …現にある良いものを全部自分で読むようにしなければならない…」(p. 14)
- ・「ただしきわめて簡単な前提条件が二三必要である。」(p. 14)
- ・「第一は、規則的にすなわち毎日例外なく一定の時間、ほんの半時間でもいいから読書をする習慣をはやくつけることである。」(p. 15)
- ・「第二の前提条件は、無用のものを一切読まないということである。これが読書のかなめだとさえ言ってよい。」(p. 15)
- ・「悪いものは絶対に読んではならない。悪いものを「研究」すると、人間の持っているよい精神がだんだん死滅してゆく。…(中略)…私たちの使命は、よい精神に住家を提供することであって、一旦はっきり選んでしまってから善と悪との間を絶えず動揺することではない。」(p. 17)
- ・「(三) …いっさいのよいものを正しく読み、その上これをたびたびくり返す、ということである。正しく読むということはなかなかの難事であるが、しかしまた大きな時間の節約でもある。というのは、正しく読んでおけば、対象をもっと深く捉えようとする時にだけ読み返す必要があって、対象のおおよそを理解するには読み返す必要がないからだ。」(p. 20)

【学生たちの感想から】

- ・「読書をするとは、趣味という捉え方もあるが、人間形成をするための手助けをしてくれる機会でもある。そのような機会を有効に利用して、他の誰にも似ない一人の人格を形成するためにも、作者が主張するような“良き書物”を見定める目を養いたいと思う。」

4. 2. 内村鑑三 『後世への最大遺物・デンマルク国の話』, 東京: 岩波書店, 1946.

〔「後世への最大遺物」: pp. 5-69〕.

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「それならば最大遺物とは何であるか。私が考えてみますに人間が後世に遺すことのできる、ソウしてこれは誰にも遺すことのできるどころの遺物で、利益ばかりあって害のない遺物がある。それは何であるかならば勇ましい高尚なる生涯であると思います。」(p. 54)
- ・「アノ人はこの世の中に活きているあいだは真面目なる生涯を送った人であるといわれるだけのことを後世の人に遺したいと思います。」(p. 69)

【学生たちの感想から】

- ・「この本を読み終わって、自分は充実した生活そして目標をもって生きているだろうかと思いました。後世へ遺物を残したいとは考えたことはありませんでしたが、自分が一生懸命生きたことを残したいと思ったし、残したくなる生き方をしたいと思いました。」

4. 3. ヒルティ 『幸福論 (第一部)』(草間平作訳), 東京: 岩波書店, 1993.

〔「時間のつくり方」の章: pp.178-193〕.

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「(一) 時間をつくる最もよい方法は、一週に六日——五日でも七日でもなく——、一定の昼の(夜でない)時間に、ただ気まぐれでなく、規則正しく働くことである。」(pp. 182-183)
- ・「最も良い考えは、仕事の最中に、それも全然対象の違った仕事の最中に、浮かんでくることが多い。」(p. 187)
- ・「ほんとうに何かを産み出すべき精神的な仕事においては、最初の一時間、あるいは往々最初の半時間が、一番よい時間だといっても決していい過ぎではない。」(pp. 187-188)
- ・「この小さい時間の断片の利用と、「今日はもう始めても無駄だ」という考えをすっかり取り除くことが、ある人の生涯の業績の半ばを形づくる、と言ってもさしつかえないであろう。」(p. 188)
- ・「時間節約のおもな方法の一つは、仕事の対象を変えることである。仕事の変化はほとんど完全な休息と同様の効果がある。」(p. 188)
- ・「常にまず一つの仕事を仕上げから、次ぎの仕事にかろうとすることもまた、少なくともわたしの経験では、間違っている。…(中略)…ひじょうにたくさんの計画や、手を着けた仕事を身のまわりに置いて、その時どきの抑えがたい気分のままに、あるいはこれに、あるいはあれに、向っていくのは正しい仕方である。」(pp. 188-189)
- ・「手早く仕上げられた仕事が最も良く、また最も効果的だというのが、わたしの持論である…。」(p. 190)

【学生たちの感想から】

- ・「時間がないということを感じるけれど、それは言い訳にしかならないということを知った。私は時間の使い方が間違っていて、それゆえ時間を無駄にしているのだなと思った。」

4. 4. サミュエル・スマイルズ 『自助論』(竹内均訳)、東京：三笠書房、1995.

(「自己修養」の章：pp.157-188, 「すばらしい出会い」の章：pp.189-206.)

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「ほんとうの意味で賢くなりたいと願うなら、まず勤勉の習慣を身につけ、先達のようにねばり強く努力していく他はない。いつの時代にも、価値あることを成すためには努力という代償がつきものだ。だから、われわれは目標を高く掲げて学問や仕事に励むことを本分とし、成果が表われるまで辛抱強く待つ必要がある。より高い目標をめざすほど、進歩は遅い。しかし真剣に精一杯努力すれば、その報いは必ず訪れる。日々を勤勉に生きる人間は、いずれその力を尊い目的のために使えるようになるだろう。進歩向上を果たした後も、われわれは引きつづき努力していかなければならない。なぜなら、人生における自己修養には終着駅などないからだ。」(p. 168)
- ・「真の教育の目的とは、他人の思想や考えをうのみにしたり頭に詰めこんだりすることではない。大切なのは知力を高め、有意義な人生を送れるよう努めることだ。そこでは、知識の量より知識を得る目的のほうがはるかに重要な問題である。われわれは、知恵を発達させ、人格を高め、より豊かで幸福で価値ある人生を送るために学ぶべきだ。知識は、人生の高い目的をより有効に追求するための活力源でなくてはならない。」(pp. 170-171)

【学生たちの感想から】

- ・「『自己修養』の章では努力することの大切さが何度も説かれているので、改めて大事なことだなあと思いました。自分は今まで努力とかあまりしないでここまでうまくやってきた（というか実際は楽な道を選んできたからそう思うのかもしれない）感じがあるので、このままではいけないと思いました。」
- ・「立派な人物は才能ではなくて努力の結果生まれるということを読み、頑張ろうと思いました。」

4. 5. セネカ 『人生の短さについて』(茂手木元蔵訳)、東京：岩波書店、1980.

(「人生の短さについて」：pp. 7-57).

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「われわれは短い時間をもっているのではなく、実はその多くを浪費しているのである。人生は十分に長く、その全体が有効に費されるならば、最も偉大なことをも完成できるほど豊富に与えられている。けれども放蕩や怠惰のなかに消えてなくなるとか、どんな善いことのためにも使われないならば、結局最後になって否応なしに気付かされることは、今まで消え去っているとは思わなかった人生が最早すでに過ぎ去っていることである。」(pp. 9-10)

【学生たちの感想から】

- ・「現在の日本人の平均寿命は大体80歳ぐらいだと言うが、これだけの人生のうちで有効に価値のあるものとして過ごせる時間が多いか少ないかはその人によるということがわかりました。私はこれからまだまだ続くであろう長い人生を、単に多忙に過ごすのではなく、いろいろなことを経験し、質のある時間をたくさん過ごしたいと思いました。」

4. 6. P. G. ハマトン 『知的生活』(渡部昇一他訳), 東京: 講談社, 1991.

〔まえがき〕: pp. 5-9, 「記憶力が悪いと嘆いている学生へ」の章: pp. 172-177, 「時間が足りないと嘆いている暇な人へ」の章: pp. 184-193, 「豊かな才能と旺盛な活力に恵まれ, 未来に遠大な計画を企てている若者へ」の章: pp. 193-207).

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「知的に生きるということは, なにかを成し遂げることであるよりは, むしろ, 最も高邁でかつ純粋な真理を熱烈に求めることなのです。それは, より大きな真理とより小さな真理との間で, 完全に正しいものと, まあ正しいと言ってよいものとの間で, 常に毅然として高貴な選択をなすことです。」(p. 8)
- ・「本質的な関連のあるものの中で連想を働かせ, 頭の中を整然と秩序立てておくことが, 知性の正しい働きと調和する唯一の記憶法なのです。…(中略)…最もすぐれた知性の持主は, 自分で真実であると考えたものを深く永遠に脳裏に刻み込む点で際立っているのと同様に, 自分にとって大切なものはなかなか憶えず, また簡単に忘れてしまうことでも際立っているのです。」(p. 177)
- ・「大きな仕事を成し遂げるには, どんな場合でも, 頭を働かせて時間を大いに節約する必要があります—多くの場合, 仕事の本当の偉大さは, 一人の人間がその仕事にどれだけエネルギーを注ぎ込むことができたかによって決めるのです。」(p. 197)

【学生たちの感想から】

- ・「今まで私は, 自分の記憶力の悪さをコンプレックスに思っていたが, このようにポジティブな考え方もあるのだなあ」と新しい発見をした。」

4. 7. 三浦修吾 『学校教師論』, 東京: 玉川大学出版部, 1975.

〔教師の知識と人格〕の章: pp. 53-60, 「芸術としての教育」の章: pp. 101-106).

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「もし教師の言うところが, 自分が平生に読んで感心していた事と匹敵するほどであったり, またそれに上越すようであったりする場合, 特に教師がそれらを自在に利用し得るのを見た場合には, 生徒はともすると教師を実価以上にも尊敬するようになるほど, 教師というものは, 彼らにとっては重いものなのである。同じ言葉や思想であるときには, 彼らはむしろ, 教師以外のものの口または書物より出たものよりは教師の口から出たものの方に, 価値をも権威をも感ずるのである。」(p. 53)

【学生たちの感想から】

- ・「教師の根本はその人格であるというようなことは聞いたことがありました。私も今まで先生方から学んできましたが, やはり, 人間として魅力があり尊敬できる人とそうでない人 [がいるということ] は, 授業を受けたり, 校内生活の中で感じたことがあります。高等教育になればなるほど, 私は知識のある先生方への尊敬は大きいものでした。しかし, 小学校の記憶を振り返ると, 足し算や引き算を教わった記憶よりははるかに生活の中で怒られたり, 一緒に活動したり, 相談したりするなど, 人間としてのつきあい [のほう] が多かったような気がします。小さい頃に受けた感銘はなかなか忘れることはできないし, 大人になればなるほど, 幼い頃の人格形成につな

がる環境は大切だったなあと思います。達人の思想を研究すること、本を読むことは、ほんとうに大切ではないだろうかと改めて考え、そして、このゼミをとらなければ、もっと浅い気持ちや知識で教職につこうと考え続けていっていたかもしれないと思い、このゼミをとってよかったと思いました。]

4. 8. 武者小路実篤 『人生論』, 東京: 岩波書店, 1938.

([33~36章]: pp.111-123, [38章]: pp.128-135, [48~50章]: pp.162-168, [56~58章]: pp.190-199).

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「自分の生命にびったりした仕事をやる事が出来るものは仕合せである。その人は自分の仕事をしていれば、益々頭がよくなり、元気になり、はっきりいろいろのことがわかってくる。自分の仕事に、自分を捧げて後悔しない。ただ自分の力の不足を残念に思う計りだ。しかしそれでも一日々々実力がませば、自ずと愉快になるわけである。…(中略)…どんな仕事でも全精神をこめて仕事をするものが、五年十年二十年と同じ仕事に、同じく熱心に力を集注すれば、遂には他の人には出来ないことを平気でやってのけるようになるであろう。それは一朝一夕の骨折りでない。だから人間は何か仕事をしようとし、その点で万人に優るものになろうと思えば、それだけの努力、苦心、精進、年期が要る。他の人に真似が出来ないだけにその道に力を尽したものは、いつのまにか、他の人を追い越して段々他の人が真似が出来ないところまで入りこむ。つまり堂に入るわけだ。それは見かけだけの勉強や、修業では駄目だ、真剣に毎日、仕事に取り組んで、あらゆる方面から目ざす方に肉薄してゆくことが必要だ。それが出来る人なら、そして十年一日の如く精進する人なら、遂にものになる。その人でないと出来ない仕事が出来、人類を大木に比較すると、その人は一本の枝を、今までよりも一寸なり、二寸なりのばしたことになり、人類はそれだけ生長したことになる。」(pp. 166-167)
- ・「十七歳から二十三歳の間にいい本を沢山よんでおくことはその人の一生にとって大事なことのようには僕には思える。この大事な齢につまらぬものを読むのは惜しいことである。出来るだけ第一流の本を読むべきである。そうすれば人生が如何に宝に満ちているものか、そしてその宝をほり出すのに暢気な心がけでは駄目なことがわかり、本気になって修業をし、心の鍛錬をする必要を感じ、いざという時動かないだけの信念を持つことが出来、真の勇氣、真に立派な人物、真に愛すべき人間、尊敬すべき人間がどんな人かよく知り、それ等の人と精神的な友人となる事が出来、この世に真剣に生き、真剣に仕事をしなければならないことを知るであろう。」(p. 193)
- ・「勉強、勉強、勉強のみよく奇蹟を生む。」(p. 198)

【学生たちの感想から】

- ・「今の時期によい本を読むことは大変すばらしいことだと思う。今やれることはたくさんあるし、やらなければいけないこともある。その選択を迫られた時、いい本から得た知識は役立つと思う。初期ゼミの中で読んだものは、今まで私が読みたいと思いつつも、手が出せなかったものに思う。」

4. 9. エッカーマン 『ゲーテとの対話(上)』(山下肇訳), 東京: 岩波書店, 1968.

(「まえがき」: pp.11-15, 「1824年」の章: pp.103-125).

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

・「『優秀な人物のなかには,』と, ゲーテはいった, 『何事も即席ではできず, 何事もおごなりに済ますことができず, いつも一つ一つの対象をじっくりと深く追求せずにはいられない性質の持主がいるものだ。このような才能というものは, しばしばわれわれにじれったい気を起させる。すぐさまほしいとねがうものを, 彼らはめったにみたしてはくれないからだね。けれども, こういう方法でこそ, 最高のものがやりとげられるのだよ。』」(p.124)

【学生たちの感想から】

・「一つのことをじっくりと追求することは今まで読んだ本にもあり, すばらしいことだと思います。教職入門という講義でも少しそのことに触れたことがあり, やはり一つのことを深く知っていることは, 生徒にとっても尊敬できるし, たとえ他のことがあやふやであっても大して気にならないことを知りました。」

4. 10. ショウベンハウエル 『読書について』, 東京: 岩波書店, 1960. (「思索」の章: pp.5-24).

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

・「数量がいかにか豊かでも, 整理がついていなければ蔵書の効用はおぼつかなく, 数量は乏しくても整理の完璧な蔵書であればすぐれた効果をおさめるが, 知識のばあいも事情はまったく同様である。いかに多量にかき集めても, 自分で考えぬいた知識でなければその価値は疑問で, 量では断然見劣りしても, いくども考えぬいた知識であればその価値ははるかに高い。何か一つのことを知り, 一つの真理をものにするといっても, それを他のさまざまな知識や真理と結合し比較する必要がある, この手続きを経て初めて, 自分自身の知識が完全な意味で獲得され, その知識を自由に駆使することができるからである。我々が徹底的に考えることができるのは自分で知っていることだけである。知るためには学ぶべきである。だが知るといっても真の意味で知られるのは, ただすでに考えぬかれたことだけである。」(pp. 5-6)

・「だれでも次のような悔いに悩まされたことがあるかもしれない。それはすなわちせっかく自ら思索を続け, その結果を次第にまとめてようやく探り出した一つの真理, 一つの洞察も, 他人の著わした本をのぞきさえすれば, みごとに完成した形でその中におさめられていたかもしれないという悔いである。けれども自分の思索で獲得した真理であれば, その価値は書中の真理に百倍もまさる。その理由は次のとおりである。第一に, その場合にのみ真理は我々の思想の全体系に繰り入れられて不可欠な有機的一部となり, この体系と完全に固く結合し, 整然と論理的に理解される。第二に, その真理はそのそなえる色彩, 色調, 特徴からして, いずれも我々自身の考え方から生まれたことを示している。第三に, その真理はちょうどそれを強く要求している時に現われたので, 精神の中に確乎たる位置を占め, さらに消滅することはない。」(p.9)

【学生たちの感想から】

・「ショウベンハウエルの「思索」を読んでみて率直に感じたことは, 前にもこのような文章・フレーズを見たことがあるということでした。たぶん以前この初期ゼミで扱った書物であったと思います。全く違う人物が, 違う時代に書いた書物なのに, どうして同じようなことを訴えているのか少

し疑問に感じました。しかしこのことは裏を返して言えば、その事柄がそれほど大事なことだということだと思ふし、その大事なことはいつの時代でも大事だとされているのだと思いました。]

4. 11. 幸田露伴 『努力論』, 東京: 岩波書店, 2001.

(「凡庸の資質と卓絶せる事功」の章: pp.110-114, 「努力の堆積」の章: pp.87-93).

【対話の中で重点的にとりあげた部分】

- ・「人々の身長の高さはおおよそ定まっているのであるから、むやみに最大範囲における最高級に達することを欲せず、比較的狭い範囲内において志を立てて最高位を得んことを欲したならば、平凡の人でも知らず識らず世に対して深大なる貢献をなし得るであろう。何をしても人はよい。一生瓜を作っても馬の蹄鉄を造っても、また一生杉箸を削って暮しても差支ない。何によらずそのことが最善に到達したなら、その人も幸福であるしまた世にも幾干かの貢献を残す。徒らに第二第三級の性格であることをも顧みずして第一級の志望を懐こうよりも、各自の性格に適應するものの最高級を志望したならば、その人は必らずその人としての最高才能を發揮して、大なり小なり世の中に貢献し得るであろう。」(p. 114)
- ・「吾人はややもすると努力せずしてある事を成さんとするが如き考えを持つが、それは間違いきった話で、努力より他に吾人の未来を善くするものはなく、努力より他に吾人の過去を美しくしたものはない。努力は即ち生活の充実である。努力は即ち各人自己の發展である。努力は即ち生の意義である。」(p. 92)

【学生たちの感想から】

- ・[[人々の身長の高さは…(中略)…深大なる貢献をなし得るであろう。]]とあるように、私はこの言葉を自分の体験からよく理解できるし、最近ちょうど身にしみて改善していたことでした。まだ改善の結果は目に見えるものではないけれど、とても励みになる言葉でした。]
- ・[最後の2行の内容は、今、そしてこれからの私の支えとなっていくと思う。私は努力が好きだし、大切だと思う。]

5. おわりに

以上本稿では、2章および3章において筆者が担当した初期ゼミの構想と展開についておもにその精神的態度を中心に論じ、後半の第4章においては授業実践の一端を紹介する形で論を進めてきた。初期ゼミの中で取りあげた書物は全部で11冊、範囲を指定して読んでもらった箇所は総ページ数は339ページであった。また、毎週レポートの形で感想やみずから考えたことなどを書いて提出してもらっていたのであるが、前期の間に学生たちから提出されたレポートの枚数を数えてみたら全部で233枚、筆者の初期ゼミの履修者は10名であったので、学生一人あたり平均でA4のレポート用紙に23枚程度書いていたことになる。ほんとうによくやってくれたと思っている。

本稿を締めくくるにあたって、初期ゼミの最後の回に提出するように課していたレポートについて触れておくことにしたい。前期に取りあげた書物の中にP.G. ハマトンの『知的生活』があって、これは著者がさまざまな立場の人々を想定してその人たちに宛てた書簡の形式をとって読者に語りかけているのであるが、筆者はここから着想を得て、前期最後のゼミで提出してもらうレポートの課題として、「この春、大学生になったあなたへ」と題して綴ってもらうことにした。その内容は、今から何年

か経ったあとの理想的な姿としての自分を心に描いて、その未来の自分が、大学に入学したばかりの現在の自分に、大学生活をどのように送ったらよいのかということについて手紙形式で語りかけそしてアドバイスをするというものである。初期ゼミを終えるにあたって、学生たちには、いま一度気持ちをあらたにして、夢をもち希望をもってこれからの学生生活を有意義に過ごしてほしいという思いを込めての課題である。そうした学生たちから提出されたレポートを読んでいると、それぞれの学生が、それぞれかけがえのない人生の主人公として、懸命に生きている姿というものがひしひしと伝わってきて、思わず胸が熱くなってくることもあった。それは教師の仕事をやっているほんとうによかったと心から思えるひとときでもあった。そして、おそらく一人ひとりの学生にとって、前期の間に書き綴ってきたレポートは、それぞれが後になって振り返ってみたときに、岩手大学に入学したころのさわやかな新緑の季節の記憶とともに、心の記録として思い出の中の大切な品になると思われたので、前期終了後に封筒に入れて一人ひとりすべて返却することにした。初期ゼミ全体を通して、筆者自身も教育に携わるものの一人として充実した時間を過ごすことができたことはまことに幸いであったと思う。

註

- 1) プラトン『国家（下）』〔藤沢令夫訳〕（東京：岩波書店，1979）104-105.
- 2) ヒルティ「読書について」『ヒルティ著作集8』〔国松孝次訳〕（東京：白水社，1979）25.

初期ゼミで取りあげた書物のリスト

1. ヒルティ『ヒルティ著作集8』（国松孝次訳），東京：白水社，1979.
（「読書について」の章，11-31）.
2. 内村鑑三『後世への最大遺物・デンマルク国の話』，東京：岩波書店，1946.
（「後世への最大遺物」，5-69）.
3. ヒルティ『幸福論（第一部）』（草間平作訳），東京：岩波書店，1993.
（「時間のつくり方」の章，178-193）.
4. サミュエル・スマイルズ『自助論』（竹内均訳），東京：三笠書房，1995.
（「自己修養」の章157-188，「すばらしい出会い」の章，189-206）.
5. セネカ『人生の短さについて』（茂手木元蔵訳），東京：岩波書店，1980.
（「人生の短さについて」，7-57）.
6. P. G. ハマトン『知的生活』（渡部昇一他訳），東京：講談社，1991.
（「まえがき」，5-9，「記憶力が悪いと嘆いている学生へ」の章，172-177，「時間が足りない
と嘆いている暇な人へ」の章，184-193，「豊かな才能と旺盛な活力に恵まれ，未来に遠大な計
画を企てている若者へ」の章，193-207）.
7. 三浦修吾『学校教師論』，東京：玉川大学出版部，1975.
（「教師の知識と人格」の章，53-60，「芸術としての教育」の章，101-106）.
8. 武者小路実篤『人生論』，東京：岩波書店，1938.
（[33~36章] 111-123，[38章] 128-135，[48~50章] 162-168，[56~58章] 190-199.）
9. エッカーマン『ゲーテとの対話（上）』（山下肇訳），東京：岩波書店，1968.
（「まえがき」，11-15，「1824年」の章，103-125）.
10. ショウペンハウエル『読書について』，東京：岩波書店，1960.（「思索」の章，5-24）.
11. 幸田露伴『努力論』，東京：岩波書店，2001.
（「凡庸の資質と卓絶せる事功」の章，110-114，「努力の堆積」の章，87-93）.